小金井市男女共同参画情報誌

かたらい

48号
2018 秋

創刊３０周年記念号

目　次

創刊30周年記念企画
p2　・市長・部長インタビュー
p4　・座談会
　～市民編集委員を経験して～
p6　・スペシャルインタビュー
　小金井市観光大使　金田和也さん
p8　国際比較
　オーストラリアの男女共同参画
p10　小金井で働く
　夫婦二人三脚 ～歯科から笑顔と元気を届けたい～
p12　小金井市男女共同参画室の施策
p13　小金井市男女共同参画施策の歩み
p14　「かたらい」これまでの発行一覧

60th
小金井市
市制施行 60 周年

周年記念

小金井市長 インタビュー

平成 29 年7月 20 日にイクボス宣言を行った市長から、イクボス宣言のきっかけや宣言後の変化、市長の考えるワーク・ライフ・バランスについてについて話を伺いました。

※「イクボス」とは、職場で共に働く部下・スタッフのワークライフバランス（仕事と生活の両立）を考え、その人のキャリアと人生を応援しながら、組織の業績も結果を出しつつ、自らも仕事と私生活を楽しむことができる上司（経営者・管理職）のことを指します。NPO法人 ファザーリング・ジャパンより

イクボス宣言をしたきっかけを教えてください。

イクボス宣言をしたきっかけは、小金井市・国立市・狛江市の3市の男女共同参画担当課が合同で企画したNPO法人ファザーリング・ジャパンの安藤哲也さんの講演会を聴いたことです。それまでもイクメンという言葉は知っていましたが、イクボスという言葉を知ったのはそれが初めてでした。仕事も家族も輝くことで、スキルも業績も伸びる。その講演会で意識改革の必要性を感じました。安藤さんを立会人として平成29年7月20日にイクボス宣言を行いました。それぞれの職員が将来に夢を持ち、自らの能力を十分に発揮し、市民の皆様の期待に応えることのできる職場環境づくりをするためには、イクボスの育成とワーク・ライフ・バランスの推進が必要です。イクボスを育成し、男性職員の育児休暇取得率を上げる取り組みを行っていきたいと思っています。

イクボス宣言をして変化はありましたか？

私自身がイクボス宣言をして意識を変えるとともに、安藤さんには管理職にもワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）の研修をしていただき、管理職のワーク・ライフ・バランスに対する意識改革ができたようです。そして、平成29年11月28日には、第1副市長、第2副市長及び教育長、平成30年1月30日には部長職者がイクボス宣言を行いました。このようにイクボス宣言が浸透していった結果、実際に小金井市役所では平成25年、平成26年に男性職員の育児休暇取得率は0％でしたが、平成27年に10％、平成28年に13.3％、平成29年に15.4％と徐々に向上しています。自治体経営においてワーク・ライフ・バランスは重要な視点です。イクボスとしてワーク・ライフ・バランスへの理解促進に努めていることで、少しずつですが、育児休業取得率の向上につながっていると思います。

ワーク・ライフ・バランスを進めていく上で、解決すべき課題を教えてください。

小池都知事はワークよりライフを大切にという意味で、ワーク・ライフ・バランスではなく、ライフ・ワーク・バランスとおっしゃっていますね。そのような意識改革も必要なことは勿論です。職場も職員の生活を念頭に置く時代ですね。実務的な課題としては、休職中の職員がいる場合、代替職員を採用するか、チームでカバーするか、という問題があります。その期間や状況に応じてどちらで対応するか判断しています。

また、子育ても仕事も小金井というように、小金井市に若い世代が定着してほしいと思っています。保育園の待機児童数は88名となっていて、人口増加もあり、まだまだ大変な問題です。

小金井市役所で取り組んでいるワーク・ライフ・バランスにかかる試みを教えてください。

小金井市役所では時差出勤制度を試行的に導入しています。夜の会議等で遅くなるとわかっている場合は、出勤時間を少し遅くするなど、仕事の時間を調整できる仕組みです。東京都では在宅勤務・テレワークを試みているようです。

それから、職員のパソコンの上に、始業時に退庁予定時刻を掲示する取組みを行っています。この取組みにより、自らの時間管理の意識付けの徹底だけでなく、退庁予定時間が周囲に見える化されるため、仕事を分担するなどの取組みにつながっている職場もあることを聞いています。

また、育児や介護に係る休暇制度を改正するなど、職場と家庭が両立するような職場環境の整備も行っています。

イクボスやワーク・ライフ・バランスを一般企業に浸透させるには

まずは小金井市役所から取り組んでいこうと思います。小金井市役所は、職員の数でいうと市内最大の事業所です。小金井市役所からイクボスやワーク・ライフ・バランスを広めていきたいと考えています。

取材を終えて

男女共同参画は「言うは易し、行うは難し」ですが、小金井市役所はイクボス宣言をしたことを実際に成果に結びつけています。市長にインタビューをさせていただき、市役所が今後も男女共同参画のリーダーとして、様々な取り組みを行ってくれることを期待できると思いました。（濱）

小金井市役所
部長 インタビュー

市長に続きイクボス宣言を行った部長職者の中から、天野企画財政部長、加藤総務部長、川合学校教育部長の３人に、職員のワーク・ライフ・バランスや男性職員が育児休業を取得した際の状況等について、話を伺いました。

男性の育児休業取得とその体制について

加藤：職員に対して、小金井市職員次世代育成支援プランハンドブックというものを作成し周知を図っていますが、もっと浸透させていく必要があります。

以前の職場では、男性職員の育児休業を経験しました。1年間の育児休業だったので、臨時職員を採用して対応しました。育児休業中も、時々連絡をとっていましたが、そのことで、職場に気持ちが繋がっていたと感謝されました。3か月に1回ぐらい職場に顔を出してくれて、子育ての話などをしてくれたのは良かったです。

天野：私の部署でも男性職員が3週間の育児休業を取得したことがあります。引き継ぎ書を作成するなど、前もってスケジューリングをしていたため、業務上の問題はありませんでした。

川合：中学校の男性教員が7か月間の育児休業をとったことがありました。その時は代替教員を東京都から派遣してもらって対応しました。別の男性職員が2か月の育児休業をしたときには、係の中で仕事を分担して対応しました。現在では、保育園のお迎えができるように時差勤務制度を利用している職員もおります。

イクボス宣言をして変わったこと

天野：人口減少社会となり、誰でも輝ける社会を目指していかなければいけません。そのためには、管理職が率先して男女共同参画を進めていく必要があります。イクボス宣言をした効果としては、ワーク・ライフ・バランスや男性職員の育児休業取得の推進をしやすくなったことがあげられますね。

加藤：昔の働き方では子供や家族といる時間がなかったですね。

私生活の充実が仕事にも活かされるとの意識は前からありましたが、イクボス宣言をしたことで、部長職の中でそのことを共有したり再認識したりできました。

川合：イクボス宣言をして、部下にワーク・ライフ・バランスを意識させる声掛けができるようになってきました。

入庁したころの小金井市役所と今の小金井市役所は違いますか？

川合：昔は管理職が遅くまで仕事をしていると部下は帰りづらい雰囲気がありました。今では意識付けや声掛けによってそのようなことはなくなっていますね。

私の時は子供が産まれてすぐに異動になったこともあり、子供が起きている時に会えないという時期がありました。

加藤：私も2週間ぐらい子供が起きている時間に帰れないということがありました。その分、子供との関わり方を考えるようにしていましたね。現在は、イクボスとして職員のワーク・ライフ・バランスを大切にしています。

管理職として気を付けていることはありますか？

加藤：職場の雰囲気が大事だと思います。今年の6月から自席のパソコンディスプレイの上に退庁予定時間が書かれた用紙を掲示する「退庁予定時間の見える化」を実施しています。職員課で試行した際には、退庁間際に仕事を頼まなくなったり、退庁予定時間が遅い用紙を掲示している職員がいた場合には、声掛けや仕事を手伝ったりと、見える化によって、いい効果が生まれています。

天野：特定の職員に仕事が集中しないようにチームとして対応できるよう改善していく必要があります。

管理職自身のワーク・ライフ・バランスは本当に難しいですが、立場上無理にでも休みを取るようにしています。管理職世代になると、介護の問題も出てきますし、色々と課題もあります。

これからの小金井市の男女共同参画について

加藤：ワーク・ライフ・バランスを広い視点で考えないといけないですね。出産・育児や介護の問題を乗り切っていくためには、周りのサポートと理解が必要です。今後、働き方は大きく変わっていくでしょう。イクボス宣言はそういったことを考えていくうえで良いきっかけになりました。

川合：世の中の動きにアンテナを張って、色々な制度の導入を考えていかないといけないと思います。

天野：第5次男女共同参画行動計画は平成32年までです。次の計画でも誰もが輝ける社会、ダイバーシティを目指していきたいと思います。

取材を終えて

現場で部下のワーク・ライフ・バランスについて真剣に考えている部長の生の声を聴くことができました。男性職員の育休の事例も増えてきており、少しずつ男女共同参画のノウハウが蓄積されていると感じました。（濱）

創刊30周年記念 座談会

～市民編集委員を経験して～

「かたらい」の編集委員であった 野口圭子さん（26 号～ 28 号）、加藤由喜枝さん（34 号～ 40 号）、吉田孝さん（37 号～ 40 号）の３人に、その頃の「かたらい」の思い出や苦労したことなどを伺い、また、今後の在り方などについてもお話しいただきました。

編集委員になったきっかけは何ですか？

野口　もともと編集の仕事をしていて、定年で仕事を辞めたあと、東京学芸大学の男女共同参画の講演会で知り合った人に、市役所の男女共同参画室で編集委員を募集しているから、あなたのこれまでやってきたことが活かせるのでないかと応募のお誘いを受けました。私は、男女共同参画というものがない時代から働いてきて、そのような活動もしてきたので、ぜひ参加させてもらいたいと思い、２００６年に応募し、委員となりました。それまで小金井市のことになかなか関わる機会がなかったのですが、「かたらい」の委員となり、取材などを通して改めて小金井市に関心を持つきっかけとなりました。

加藤　私が勤めはじめた頃、会社に電話が掛かってきて私が出ると、「誰かいる？」と言われ、女性というだけで相手にしてもらえませんでした。会社の中では、女性社員として周りから優しく扱われたのですが、戦力としては扱われなかったのです。ですが、男性社員は営業で外出していることが多く、社内にいることが少なかったため、そのうちに「男性社員がいなければあなたでいいよ」と言われるようになりました。いつも社内にいる女性社員の方が話が分かると取引会社の人達も考えるようになり、信頼されるようになってきたとも感じていました。

　まだその頃は、女性は結婚して退職する人が多かったのですが、私は先輩の助けもあり、定年まで勤めることができました。その間に世の中も、男女雇用機会均等法ができたり、管理職に就く女性も出てきたりして、少しずつ変わってきたと感じました。

　そして定年退職した後、市民として小金井市に関わっていくことを考えた時に、男女平等ということにも関心があったので、２０１２年に「かたらい」の編集委員に応募いたしました。

吉田　私の生まれは中野ですが、すぐに小金井市（当時、北多摩郡小金井町）に引っ越して来ました。第三小学校入学後ずっと小金井に住んでいますが、会社員時代は、日々仕事が忙しくもあり、市報も読んだこともなく、小金井市については無関心そのもので過ごしていました。

　定年退職後、知人からの紹介で市民実行委員が講演会などを企画・運営する「こがねいパレット」に２００８年から２０１０年まで実行委員として参加しました。そこで、「こがねいパレット」が「かたらい」と同じ男女共同参画室の所管であったことから、２０１３年に「かたらい」の編集委員として参加しました。

　それまでは、少し考え方が古かったのかもしれませんが、男女共同参画について考えることは無かったですね。ごめんなさい。

　最近、編集委員に応募した時の応募書類を読み直すと、「人としてお互い語り合い、認め合いたいという気持ちで応募した」と書いてあります。

「かたらい」を作ってみて

野口　取材でハローワークを訪ねたり、日本経済新聞社の女性編集委員を取材したりと、いろいろなところ

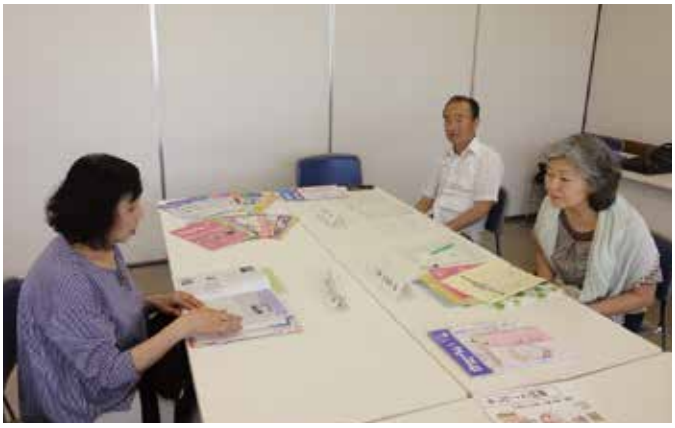
左から　野口さん、吉田さん、加藤さん

へ出かけられたのはよかったです。また、桜町病院のホスピスのシスターや、学芸大学の先生から直接、話を聞くことができ、勉強にもなりましたし、取材は大事だなと思いました。読者にどれだけ受け入れられたのかはわかりませんが、地元や現場で取材してインタビューをまとめることでリアリティのある記事を作ることができたのではないかと思っています。

加藤　私も取材をすることができてよかったと思います。取材をする際に、男女平等に関わる専門家や女性の進出が難しい世界で生きる方など、個人では出会えない方々ともお会いでき、勉強にもなりましたし、楽しかったです。編集会議では、取材先でどんな話を伺いたいかなどのアイデアを出し合ったりと、みんなでワイワイと楽しい会議でした。また、国際比較という連載では、ウルグアイや台湾から来た方など、いろいろな国の方の意見を聞けて面白かったです。

野口　ただ、地元で働く人達の話を聞く機会があまりなかったですね。また、企業に話を聞きに行ったときに働いている女性のことは聞けましたが、職場の中の男女平等については聞くことができず、残念だった思い出があります。

吉田　現場主義というか、足で歩いて現場で自分の耳で話を聞くのはよかったです。特に東京学芸大学ラグビー部で、男子学生と一緒に練習している女子部員の取材は、ラグビーの魅力を知ることができて、とても面白かったです。



加藤　「かたらい」の作り方としては、自分がやりたい案を出して、そのほかの方も興味があればインタビューに行くというかたちでした。いろいろな意見の方が編集委員として集まって、一つの物を作り上げることの楽しさがあったと思います。

苦労したことや学んだこと

野口　やってきたことがなかなか読者に伝わらないもどかしさに苦労しました。

加藤　テーマを絞ることが大変でした。また、多くの貴重なお話をいただいたのに、文字数の関係から内容を絞っていくことに苦慮しました。

吉田　男女が平等で、差別のない社会の大切さを学びました。また、取材を通していろいろな方と知り合うことができたこともよかったです。

野口　小金井市に興味と関心を持つようになりました。公民館の企画実行委員になったり、今までは仕事を中心にした問題意識でしか捉えられなかったのですが、地域に目を向けるようになりました。社会的には男女平等が求められるというところは、まだ数多くあるということも学びました。

今後の「かたらい」について

野口　参加型でないと、なかなか興味がわかないのではないでしょうか。読者からの「声の欄」を作ったら面白いと思います。囲みでもよいので、誌面に市民の一言があるといいですね。

吉田　読者欄を作り、読者とのキャッチボールができるのも面白いと思います。「かたらい」を男女共同参画のバックボーンとして、これからも守っていってほしいです。この場をお借りして、皆さんに一句送ります。

「一度の人生紡ぐとき　男と女縫い目なく　互いにほぐれて癒されて」

加藤　広報の方法ですが、どのように周知を図っていくかが課題です。「かたらい」を置く場所を増やした方がいいかもしれませんね。

若い世代の人に、子育てを大事にしながら、実体験から上がってくるテーマもあると思いますので、是非編集委員をやってほしいです。

※「かたらい」は17号から市民編集委員が企画・編集・執筆等を行っています。
※文中敬称略

取材を終えて

どうもありがとうございました。皆さまの提案などを参考にさせていただきます。特に「声欄」のご提案は、「かたらい」の新しい側面をもたらすものです。私達も頑張りますので、よろしく応援をしてください。（佐）

創刊30周年記念 スペシャルインタビュー

小金井市観光大使　金田和也さん

2012 年ロンドンオリンピック男子 200mバタフライに出場され、小金井市の観光大使でもある金田和也さんにオリンピック出場までの険しい道のりや、現在のお仕事、共働きでの家事・育児などのお話を伺いました。

水泳を始められたきっかけについて教えてください。

私の実家はスイミングクラブを開いているので、私も0歳の頃から両親と一緒にプールに入っていて、物心が付く頃には自分で泳いでいました。母親はオリンピックに選手として出場した経験があり、また、祖父は1964年の東京オリンピックで日本水泳連盟の役員をするなど、周りの人たちが水泳に関わっている環境で育ってきたので、水泳をしないという選択肢はなかったように感じています。

ですが、小学校までは野球がすごく好きで少年野球チームに入って野球を一生懸命やっていました。その後小学校6年生の春に少年野球チームを卒業して、そこからは水泳を本格的に始めました。そして中学生になる直前に初めて全国大会に出場し、中学と高校では全国大会で優勝をしましたが、高校生の時に大きなケガをしてしまいました。

どの程度のケガだったのですか

高校3年生の時のケガは、肘の粉砕骨折とじん帯の断裂でした。ちょうどその頃は、水泳のジュニア大会のヨーロッパ遠征なども決まっていた時期で、国内外のいろいろな大会に全部出場できなくなました。最初は腕を上げることもできずに、水泳選手として選手生命も危ないのではないかとも言われとても辛い時期でした。

その後ケガは回復していたのですが、大学3年生の夏まで全く記録が出せずに、ずっと悩んでいましたが、それでも諦めずに地道に練習を続けていた結果、大学3年生の後半から全国大会に出場できるまでに復活しました。そして、大学4年生の時に2008年の北京オリンピック銅メダリストの松田丈志さんに短水路（注：25mプール）の試合で勝って、日本で一位を獲ることができました。

その後選手として順調でしたか

これまでの競技生活の中で、節目節目に自分の力を出しきり記録の更新につなげることができてきたのですが、社会人になって2年半くらいの間は全く結果が出なかった時期がありました。

2011年は個人競技の結果も思わしくなく、日本ランキングで前年は3位くらいの成績でしたが、8位、9位と下がってしまい、後輩やライバル達のタイムが伸びていく中で、思うようにタイムが伸びずに最後は追抜かれてしまいました。そして、オリンピック合宿の参加中の、2011年12月に尊敬していた祖父が亡くなりました。合宿の途中でしたが家族の事が心配で帰宅し、スイミングクラブの受付や水泳指導を行いました。これまで家族が力を合わせてスイミングクラブを支えてきたなかで祖父の存在はとても大きく、両親や家族のみんなが祖父が亡くなった辛い状況の中でもスイミングクラブを続けていくために一生懸命働いている姿を見て、私も家族をサポートしていきたいという思いを強く感じていました。悲しい気持ちの中で、でも続けていくためにしなければならない事を一生懸命に力を合わせてやっていくしかない・・・とそんな状況だったので練習できない時期が2週間くらい続きました。ちょうど5か月後に、2012年4月のロンドンオリンピック選考会を控えている頃のことでした。

現役選手にとって練習できない時期は影響が大きいのではないですか

2週間泳がないと、泳ぐ感覚だけではなく体力も落ちてしまうので、通常現役選手は、1年のうち連続して休むのは長くても3～4日位ですね。お正月もゆっくり休む事はないので、2週間泳がないというのはものすごく長い期間でした。それでも諦めずに努力してなんとか選手としての感覚や体力を戻してシンガポールの合宿に参加しました。

これまで様々な苦しいことや辛いことは多かったのですが、家族や周囲の皆さ

んからのサポートがあり、選手としてロンドンオリンピックに出場できたことや短水路の試合で優勝し日本一という結果を残す事ができたと思っています。本当に感謝しています。

ご夫婦ともにオリンピック選手ですね。お２人が出会われたきっかけは

初めて彼女に会ったのは中学のときで、お互いに東京都の各年代別代表選手でした。その後各種目ランキング６位以内の選抜合宿への参加など、いろいろな場所で会っていましたが、交際が始まったのは高校２年生のときです。

しかし、記録が伸び悩んでいる時期に、周囲からは「恋愛が邪魔するから別れなさい。」などと言われたこともありましたが、「二人で見返そう、結果を残そう」とお互い励まし合うことができたのがよかったと思います。私がケガをした時にも、彼女に励まされながら辛いリハビリを乗り越えました。

最後には一緒にオリンピックに出場でき、約10年間の交際を経て２０１４年に結婚しました。

ご家庭での子育ての様子について教えてください。

現在、1歳の娘がいます。共働きなので、平日は預けているのですが、私が休みの日は積極的に育児に協力しています。普段は仕事上なかなか娘に会うことができないので、一緒に遊べる日はいろんなところへ行っています。

家事については、その日の状況で臨機応変にやっています。お風呂掃除や食器洗い、洗濯などももちろんやります。

現在はどのような仕事をされているのですか

法政大学を２００９年度に卒業した頃は、プレイングコーチとして、選手たちにアドバイスをしながら一緒に練習していましたが、その後、競技を引退し２０１３年コーチに専任するようになりました。

現在は大学のスポーツ健康学部で週に2回スイミング実習の講義をしています。講義では、学生自身が泳げるようになることと、指導するときのポイントを中心に授業をしています。そして、法政大学の多摩キャンパスでは、毎朝家を4時半過ぎには出て、朝練のコーチを6時から9時までやっています。水泳部の部員は現在50数名です。そのあとは、小金井に戻ってきてスイミングクラブの準備、レッスンの指導や送迎バスの運転をやっています。

最後に金田さんの夢を教えてください。

1つ目は、オリンピック選手を自分で育てることです。今のスイミングクラブは老朽化が進んでいるので事故が起きるリスクが高くなる前にということで今年7月に閉鎖をすることになりました。用途的に現在の場所に建て替えができないため、現在、小金井市を中心に土地を探しています。

2つ目は、子ども達に夢を与えられるような活動を続けたいなと思っています。

私が２０１２年のロンドンオリンピックに出場したときに小金井市でパブリックビューイングが行われて、大勢の市民の皆さんが応援してくれました。そして帰国後は、市内の小・中学校の全校を訪問して子ども達に水泳のことを伝えたり、妻のメダルを見せたりしました。その時子ども達が一生懸命に私の話を聞いてくれてとても興味を持ってくれました。そんな子ども達の姿に力をもらい、これからも未来のある子どもたちに夢を与えられるような活動をし続けたいなと思っています。そして、その活動を地域に根差した形で継続したいと思います。

（注：インタビュー当時は、スイミングクラブは営業中でした。）

取材を終えて

インタビュー中、終始笑顔でお話しされる姿がとても印象的でした。

子ども達のためにも、スイミングクラブが早い時期に再開される事を期待しています。

（菰）

国際比較

オーストラリアの男女共同参画

オーストラリア育ちのスティーブンさんと、日本人のふみのさんご夫婦に、国際結婚や、国家間の違いについて伺いました。

Q スティーブンさんのご出身エリアについて教えて下さい。

母がイギリス人なので、9歳までイギリスで過ごしました。その後はずっと父の出身国のオーストラリアで育ったので、アイデンティティはオーストラリアにあります。シドニーの北にある、東沿岸部のブリスベンで育ちました。ブリスベンのあるクイーンズランド州には自然が多く、世界有数のリゾート地、ゴールドコーストでは、トロピカルな雰囲気が楽しめますが、日本より涼しく過ごせます。

Q 来日されたきっかけは？

元々、オーストラリアで、留学生をはじめとした外国人対象の英語教師をしていました。生徒にアジア人留学生が多かったこともあり、アジアに行ってみたいと思っていました。最初は日本、次に韓国、中国、と考えていたのですが、日本で妻と出会い、そのまま日本にとどまっています。いつか、韓国、中国にも行ってみたいけれど、移住するならオーストラリアに戻りたいです。

Q 現在のお仕事は？

グローバル企業を中心とした日本の社会人たちに向けて、企業に出張してビジネス英語を教えています。

Q 日本の好きなところは？

日本人の優しさや、サービスのいいところです。現在、両親はイギリスに住んでいますが、日本のサービスが完璧すぎて、イギリスのホテル滞在時にストレスを感じるようになってしまいました。

日本食も好きです。一番好きなのは、妻の作る赤だしのお味噌汁。イカ、タコ、わかめなども好きです。

日本に来て良かったと思う点は、日本語を勉強することで、日本の視点からも物事を考えられるようになったこと。日本のカルチャーを日本の視点から見られるようになって、色々な発見があり、物事の考え方が広がりました。

Q 逆に、日本の苦手なところはどこですか？

日本の猛暑とラッシュアワーが嫌いです。涼しい地域のイギリス人の血も受け継いでいるので、体感温度は日本人より3度は違うと思います。夏はとにかく暑い。オーストラリアは車文化なので、日本のような電車のラッシュアワーはありません。かわりに高速道路の渋滞がひどいです。

コミュニケーションの曖昧さも苦手です。日本人は、質問をしません。会話の中で分からないことがあっても、その場では言わず、後になってから「どういうことだったの？」と聞く。私が英語を教えている学生たちは、ポテンシャルも高く、やる気もあるけれども、特に年配の男性が、たまに黙り込んで『サムライ』になります。日本人の会話と、欧米の会話では、気を使う部分が違います。日本人は空気を読もうとして積極的に自分の意見を言うことをしませんが、欧米人はもっとはっきりと意見を言います。私は仕事の生徒たちに「丁寧な言葉を使って、本音を出して下さい」と指導しています。

Q 日本人女性との結婚生活はいかがですか？

妻は、英語が上手ですし、物事の考え方も日本人っぽくないと思いますが、日本語で日本人と話しているときには、日本人になります。言葉と文化は分けられないものなのだと思います。

イギリスに帰省したときにも、妻は空気を読みすぎて会話に入りにくいようです。

ふみのさん：イギリスに帰省中、どのタイミングで話しかければいいのか空気を読んでいると、会話に入れません。でも、相手の顔を見ず、空気を読まずに話す勇気がなかなか湧かないときは、ワインを飲んで気持ちに勢いをつけています。

夫婦の間では、普段から言いたいことを、言いすぎるくらい遠慮なく言い合っています。夫には、男性だから、女性だからという感覚はなく、一人の人間として尊重してくれます。なにか悩むことがあると、夫は「ふみのが幸せな方向がいいと思う」と言ってくれます。

話し合いのときは、お互いに自国語を話すようにしています。私が英語を話せると言っても、学校で覚えた文法と実際のニュアンスに違いがあります。正確に理解できないことが、火種になるよりは、「相手には分からないだろう」という言葉で言い合う方が、お互いの傷も浅いですから。

Q 家事や育児の分担は？

家事は、お互いに、その場でできることを、できる人がやっています。特に分担はありません。平日は仕事があるのでなかなかできませんが、料理も好きです。今は、妻の方が家にいる時間が長いので、家事は妻の方が多いと思いますが、イギリスに帰省したときは、ほぼ、料理を担当しています。

育児に関して、オーストラリアでは男性も積極的に参加します。日本には「イクメン」という言葉がありますが、どうしてそんな言葉が生まれるのか分からない。男性にとっても自分の子供なのですから、育児するのは当然です。

我が家には、小学2年の息子が1人いますが、日本で生まれ育っており、どちらかといえば日本語の方が得意なので、息子とお互いに言葉を教え合っています。息子に、「パパも前に言ってたことじゃない！」と、言い返されることもあり、大事なコミュニケーションの時間になっています。

言葉を教え合う以外にも、一緒にサッカーやボードゲームをするなど、子供と遊ぶことが大好きです。

Q 息子さんへの育児方針は？

国際的な視野を持つ人間に育って欲しいです。言葉については、今現在、日本育ちで日本の公立小学校に通っているので、日本語の方が得意です。日本語で読書するのが好きですが、テレビは英語の番組の方が好きなようです。例えば、イギリスに帰省したときなど、日本語の話せない英語圏の人と話すときには、英語を話せます。でも、無理に英語を喋らせようとすると、不自然に思うようです。英語サッカースクールに参加したときに、スタッフ間で英語が飛び交っていたのですが、「どうして日本にいるのに、わざわざ英語を話さなきゃならないの？」と、英語で話しかけることに消極的でした。

ただ、息子の話は、日本語なのに英語の構造が出てきます。例えば、「ママ、どこに行きたい。なぜならね……」という順番です。英語の because です。こうしたところでも、言葉が思考の方向を作っていく、文化と言葉は切り離せないと実感します。

Q 他に、文化と言葉は分けられないと思われることはありましたか？

「悔しい」というニュアンスの言葉は、オーストラリアでは余り使いません。日本ではよく、スポーツで負けると悔しがりますが、「全力を出し切ったなら、それでいい。これからまた頑張ろう」という考え方をするからです。

「仕方ない」「しょうがない」という考え方にも慣れません。大切なのは、次に何をやるかです。

「お疲れさま」も日本独特だと思います。直訳できる言葉は、英語にはありません。

Q 今後の夢はありますか？

現実的な夢としては、息子が国際感覚を身に付けながら成長して欲しいという気持ちがあります。できれば中学校、遅くとも高校までには、オーストラリアに帰国して、オーストラリアの学校で学ばせたいです。今までにも一家でオーストラリアに移住したい気持ちはありましたが、イギリスに住む両親の事情もあって、実現しませんでした。日本の居心地が良かったから、どうしても移住する気持ちにもならなかったのだと思います。息子の進学先も、最終的には息子の意思が大事なので、移住するかは分かりませんが、視野の広い人に育って欲しいと思います。

取材を終えて

スティーブンさんにふみのさんに惚れ込んだポイントを聞くと、「やめて、恥ずかしい！言わないで！」と、叫ぶふみのさんですが、「英語圏の人たちと、英語で話しているときなら『サンキュー！』って言えるんですよね。日本人の前だとね……。」と、仰有います。「言語と文化の関連」を体現していらっしゃいましたが、私は「サンキュー！」と言い合える明るさが素敵だと思いました。（田）

小金井で働く

夫婦二人三脚
～歯科から笑顔と元気を届けたい～
こいそ歯科クリニック

共働き世帯が増える中、仕事と家事・育児の両立はますます大きな課題となっています。
ご夫婦で歯科医院を開業されているお二人に、これまでどのようにして両立させてきたのかお話を伺ってきました。

歯科医を志すようになったきっかけを教えて下さい。

和成さん：実家が農家で、私は次男だったので「何か手に職をつけられるといいね」と両親と話をしました。その結果、興味を持ったのが今の職業でした。

英里さん：私は父が医者で母は臨床心理士でした。その流れで自然と医療に興味を持ちましたが、人の死と向き合うのは辛いし、血も苦手でした。そうなると医師も看護師も、獣医も…となり、歯科医師になろうと思ったのですが、その後も何を目指そうか決めかねていました。そんな時に大学の授業で矯正のビフォー・アフターの写真を見ました。その写真に写った患者さんの表情の変化を見て「これだ！」と思って決めました。

お二人が開業に至るまでの道のりを教えて下さい。

英里さん：夫との出会いは、大学のクラスメイトで、初めはサッカー部の選手とマネージャーという関係でした。その後お付き合いをすることになりました。

和成さん：大学を卒業後1～2年間は大学病院で研修医として働きながら、お互い週末はアルバイトの日々でした。その後、分院長を経験して11年前の平成19年に小金井市でこいそ歯科クリニックを開業しました。

英里さん：私は実家が小金井市にあったこともあり、子どもが小学校へ上がる前のタイミングでこちらに引っ越してきて、市内で開業しました。

学生時代から将来のビジョンが決まっていたのですか

英里さん：最初は収入が少なくて、結婚は全く考えられませんでした。ただ、医者だった父はそんな状況をよく分かっていてくれたので、8年ほど付き合っていた時に「なぜ結婚しないの？お金なんて後から付いてくるものだよ。」と言ってくれて、そこで初めて「結婚もありなのかな。」と思い始めました。

和成さん：最初は一緒に開業しようとは考えていませんでした。お互いにやりたいことを選んでいつの間にか今の形にうまく収まった、という感じです。

仕事はどのように分担していますか？

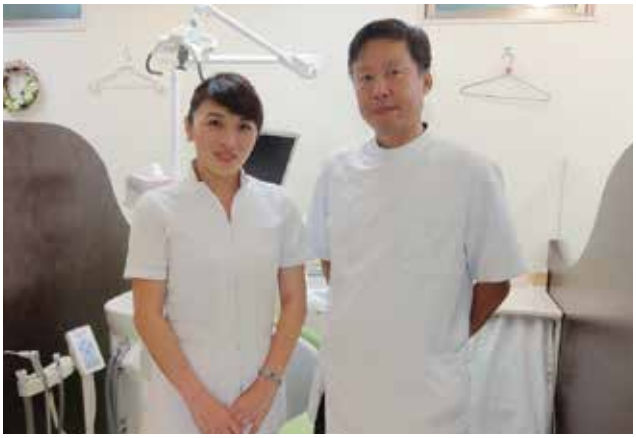
英里さん：夫は一般歯科、私は矯正歯科をやっています。夫はフルタイムで診療をしていて、私は火曜日と金曜日はこいそ歯科で矯正を、それ以外の日は外部の歯科へ出張して矯正の仕事をしています。ただ、今は後輩育成のためにも外部の仕事を減らしていて、家庭と仕事のバランスは半々くらいになっています。

開業当初は私も一般歯科を行っていましたが、同業者同士のためお互いの意見が合わないこともあり、その後は完全分業にしました。家に帰ってまで、職場での意見の相違を持ち込みたくはないので、開業してわりとすぐに今の形に落ち着きましたね。

和成さん：分業したことによってお互いの仕事を認め合えて尊敬しあえる面が増えたと思います。

仕事と家庭の両立をどのようにされていますか？

英里さん：今のクリニックでの矯正歯科は、夕方からの仕事が多いので、午前中の時間を家事に当てていることが多いです。矯正歯科の仕事は、ある程度スケジュールをコントロールできるので、私には向いている職業だと思います。ただ、振り返ると、大学病院に



左：英里さん　　右：和成さん

勤めていた時代は、子どもの保育園の送り迎えもあったので、今思えば一番大変だった時期でしたね。家族総出で家事や育児を手伝ってもらっていましたし、市のファミリーサポートセンターにも随分助けてもらいました。孫のように接してくれて、子どもも楽しんでいました。今でもクリスマスカードや年賀状でやり取りをしています。

子どもが小さい頃は、保育園で知り合ったお母さん・お父さんたちとみんなで集まって遊んだりしていました。そうして地域の人たちとつながりが増えていったように思います。

和成さん：みなさん子どもに対してあたたかいので、他人の子でも遠慮なく叱ってくれました。昔ながらのつきあい、昭和のような子育てがそこにありましたね。

英里さん：子育ての忙しい日々を乗り越えられたのは、本当に周りの方々に恵まれたのだと思います。

働きながら子育てをする中で大変だったことは

英里さん：子どもは生まれた時にしばらく入院していて、お互いに仕事があったのでいろいろ大変な時期がありました。

和成さん：今考えてみると古い考えなのですが、当時は子どもの事で仕事を休まないといけない時は、何となく女性が休むべきなのかなあと思ってしまっていました。そこで妻と意見が合わなかったこともありましたね。今は「共働き」という状況をもっと理解して、父親として子育てに関わっていくべきだと感じています。

英里さん：夫は開業医という病院を背負っている立場なので代わりの先生がいない、私は大学病院勤めだったので代わってくれる先生がいる、という仕事の環境や立場が違うことをわかってはいるつもりだったのですが、妻が仕事を休むことが当たり前だと思われることはちょっと違うと思いましたし、お互いに子育てをしていく中で、なかなか意見が合わないときもありました。

和成さん：「ごめんね」という一言や、相手への気遣いは大切ですね。

英里さん：私も子どもの具合が悪い時などは、夫に休んでほしいという事より、患者さんの立場から見たら自分たちは担当の先生という同じ立場にあることをわかって欲しいと思っていました。

いつ頃からお互いをうまく理解できるようになりましたか？

英里さん：私はここ最近ようやくでしょうか。子どもが大学生になって手が離れたことと、上手く夫に頼めるようになってきたことがきっかけだと思います。以前は言わなくても気づいて欲しい気持ちがあったので、「どうしてわかってくれないのだろう？」と思うことが度々あったのですが「言わなきゃわからないのだな。」ということが分かり、少し気が楽になりました。今は仕事と家事のバランスが取れていて、家事全般をしていること自体はそんなに負担には感じていないのですが、やはり夫に頼めることはなるべく頼むようにしています。

和成さん：最近はゴミ出し・洗濯物を畳む・食器洗いなどを一部やっています。妻も働いているので「とりあえずこれだけは！」という気持ちですね。ポイントを押さえてやっています。

育休などは取得されましたか？

英里さん：20代で出産をしましたが、実は当時大学病院の医局に勤務している中では私が初めてだったのです。

私の場合は、直前まで仕事をして、その後、育休などを取ることなくすぐ医局へ復帰しました。周りの協力を得ながら仕事と育児を両立していきたいと思いましたし、出来るだけ仕事に接していない期間を作りたくないという気持ちもありました。ですが、今思えば女性が働き続けるには厳しい時代でしたが、当時はそれが当たり前でした。

そんな経験があったからこそ、うちの医院では女性のスタッフが働きやすい環境作りを工夫しています。赤ちゃんがいても働き続けられるように、休みづらくないようにしています。

和成さん：現在スタッフは10名です。主婦の方も学生さんもいますので組み合わせに工夫してシフトに穴が空いても大丈夫なようにしています。

子育てで気をつけていたことは何ありますか

英里さん：子どもの将来については、親から押し付けられるのは嫌だろうし、特に何も言ってこなかったです。ただ、「自分たちの職業はやっていていい仕事だと思うよ。」とは伝えていました。

今、子どもは歯科大に通っていて、自分で選んで決めた道を頑張っている姿を見るのはうれしいですね。

これからやってみたいことはありますか

英里さん：いずれこの医院を渡して、違うことがやれたら楽しいかなって思っています。夫婦揃ってお酒が好きなので、仲間内で気軽に集まれるお店なんかもいいですね。

和成さん：僕は精一杯仕事をして、精一杯趣味の釣りやサッカーを楽しんでいきたいですね。

取材を終えて

お二人が何度も周囲の人に恵まれて、と仰っていたのが印象的でした。それはお二人の人柄があってこそだと思います。貴重なお話が聞けて大変勉強になりました。

（佐々）

小金井市男女共同参画室の施策

小金井市がめざすべき男女共同参画社会は、「男女が互いにその人権を尊重し、認め合い支え合いながら、それぞれの個性と能力を十分に発揮することができ、また、一人ひとりが輝いて生きることができる社会」です。

男女共同参画室では、男女共同参画社会の実現に向け、さまざまな啓発活動を行っています。

男女共同参画シンポジウム

男女平等基本条例、男女平等都市宣言等の趣旨を普及させるため、毎年開催しています。

シンポジウム開催の様子

こがねいパレット

市民と市が一緒に行う男女共同参画推進のための事業で、男女がともにいきいきと暮らせる社会をめざして、公募の市民実行委員により企画・運営し、毎年講演会等を開催しています。

平成 29 年度こがねいパレット

多摩３市男女共同参画推進共同研究会

小金井市、国立市、狛江市の３市が連携を図り、共同研究を通じて、男女共同参画社会を実現し、地域の活性化と発展につながる取組を行うことを目的とし、平成２５年１月に発足しました。

平成 29 年度からは、市民サポーターを募集し、３市の職員と連携しながら、男女共同参画への理解促進を図っています。

多摩３市男女共同参画推進共同研究会で作成した啓発冊子

第５次男女共同参画行動計画

市では、『人権尊重とワーク・ライフ・バランスを軸とする男女共同参画の実現をめざして』を基本理念に、平成２９年３月に第５次男女共同参画行動計画を策定しました。

行動計画を総合的かつ計画的に推進し、実効性あるものとするため、毎年、事業を検証・評価し、報告書を作成し、公表しています。

小金井市男女共同参画施策の歩み

昭和52（1977）	第1回「福祉を語る婦人のつどい」開催（昭和61年まで毎年開催）
55	議会で「婦人に対するあらゆる形態の差別撤廃条約（女子差別撤廃条約）の早期批准に関する意見書」を採択
56	『福祉をさぐる婦人の目でみた手づくり白書』発行
57	**非核平和都市宣言**
59	福祉部保育婦人課に「婦人施策推進室」設置 「婦人問題懇談会」を設置（年内解散） 「婦人問題解決のための小金井市婦人行動計画（第1次）」策定
60	「婦人問題会議」（市民）設置 「東京都諸外国への女性派遣事業」に市民派遣（以降平成9年までに4回） 市報こがねいに「婦人のひろば」を設置。以降毎月5日号掲載 「婦人問題に関する意識と生活実態調査」実施
61	「婦人関係行政連絡会議」（庁内）設置 『福祉を語る婦人のつどい10年史』『婦人問題を考えるくらしとことば』発行 『婦人団体・グループ名名簿』作成
62	第1回「こがねい女性フォーラム」開催 「婦人行動計画推進のための提言」（婦人問題会議） 『作文集　女の自立・男の自立』発行
63	第2期「婦人問題会議」（市民）設置 婦人会館（昭和42年開館）内に「婦人談話室」（現女性談話室）設置 **『かたらい』創刊** 「婦人問題相談事業」開始
平成2（1990）	「婦人行動計画推進のための提言」（第2期婦人問題会議） 第3期「婦人問題会議」（市民）設置 『市報こがねい婦人のひろば－5年のあゆみ－』発行 『婦人問題を考えるくらしとことば　そのⅡ』発行 「女性海外派遣事業」開始（平成14年まで毎年実施）
3	組織改正により名称を「女性施策推進室」に変更、企画財政部広報広聴課の所属となる。 「国内交流集会」市民宿泊参加（平成9年まで） 「男女平等に関する意識と生活実態調査」実施
4	「男女平等推進小金井市行動計画」策定への提言（第3期女性問題会議）
5	「女性施策推進行政連絡会議」（庁内）設置 「女性行動計画策定検討委員会」（庁内）設置
6	「第2次行動計画ともに生きる小金井市行動計画」策定
7	第4回世界女性会議（ＮＧＯフォーラム北京）へ派遣 「男女共同参画研究会議」（市民）設置
8	「審議会等の女性参画推進に関する提言」（男女共同参画研究会議） 「こがねい女性ネットワーク」設立 **男女平等都市宣言**
9	『女性人材リスト』作成
10	『市報こがねい女性のひろば「5年のあゆみ」－第2集』発行 「男女平等推進のための小金井市職員の意識調査」実施
11	「女性市議会」開催 「男女平等に関する市民意識・実態調査」実施
12	**『かたらい』に市民編集委員制導入**
13	「女性施策推進室」を「男女共同参画室」に、「女性施策推進行政連絡会議」を「男女共同参画施策推進行政連絡会議」に名称変更 －男女共同参画社会の実現をめざして－「小金井市行動計画」策定への提言（第3期男女共同参画研究会議） 「（仮称）第3次小金井市行動計画策定委員会」設置 「こがねい女性フォーラム」を「こがねいパレット」に改称し開催
15	「第3次行動計画　個性が輝く小金井男女平等プラン」策定 **「男女平等基本条例」施行** 「男女平等推進審議会」（市民）設置 市報こがねい「女性のひろば」を「みんなのひろば」に改称 第1回「男女共同参画週間のつどい」開催 **『かたらい』を年2回に増やして発行**
16	『男女共同参画団体・グループ名簿』新規作成 「ＤＶ相談緊急連絡先広報カード」作成 「国内研究事業参加補助」実施 「苦情処理窓口」及び「苦情処理委員」設置
18	「男女平等推進のための小金井市職員意識調査」実施
19	組織改正により広報広聴課から企画政策課の所属となる。 「男女共同参画週間のつどい」を「男女共同参画シンポジウム」に改称して実施 「男女平等に関する市民意識・実態調査」実施
21	「再就職支援講座」を㈶21世紀職業財団と共催
22	「配偶者暴力対策基本計画」策定 「再就職支援講座」を㈶東京しごとセンター多摩と共催
24	「男女平等に関する市民意識調査」実施 「男女平等推進のための小金井市職員意識調査」実施
25	「第4次男女共同参画行動計画」策定（配偶者暴力対策基本計画を内包） 「多摩3市（小金井市、国立市、狛江市）男女共同参画推進共同研究会」設置
27	「男女平等に関する市民意識調査」実施 「男女平等推進のための小金井市職員意識調」実施
28	「小金井市特定事業主行動計画（第2次小金井市職員次世代育成支援プラン、小金井市女性職員活躍推進プラン」策定
29	「第5次男女共同参画行動計画」策定（配偶者暴力対策基本計画及び女性活躍推進計画を内包）

福祉を語る婦人のつどい（61年のみ「福祉を語る市民のつどい」で開催）

福祉部保育婦人課に婦人施策推進室

こがねい女性フォーラム

企画財政部広報広聴課に女性施策推進室

男女共同参画室に改称

こがねいパレット

男女共同参画週間のつどい

男女共同参画シンポジウム

企画政策課に配置（男女共同参画室）

「かたらい」これまでの発行一覧

平成２０年１２月からの約１０年の間に
これだけの「かたらい」が発行されました。
各号の企画内容に時代の変遷が見られます。

※各号の内容は主なタイトルを抜粋してご紹介しています。

３２号　平成２２年１２月

●選択的夫婦別姓
夫婦同姓の国 日本／選択的夫婦別氏制度-再論にむけて-／姓についての歴史／夫婦別姓に反対／日韓国際カップルに聞く
●小金井で働く
●国際比較
（夫婦の姓）
●インフォメーション
国内研修事業参加費補助制度

３３号　平成２３年３月

●イクメン
イクメン座談会／パパの物語／父であることを楽しもう！
●小金井で働く
●国際比較
（お父さんの育児休暇）
●インフォメーション
女性総合相談／BOOK REVIEW

３４号　平成２３年１０月

●女性と防災
つなぐ・結ぶ 支援の環／女性視点での被災者支援／被災地を見てきました／小金井市の防災対策／小金井市防災地図
●国際比較
●梶野公園に出かけてみませんか
●小金井で働く

３５号　平成２４年３月

●結婚観
寄稿「結婚観」／結婚観は変化したのか、しないのか？
●小金井で働く
●国際比較
（結婚観の国際比較）
●DVチェックシート
●男女共同参画施策紹介

28号（20周年記念号）平成20年12月

●戸籍制度を考える
●「かたらい」発行と背景
●歴代室長からのメッセージ
●小金井市女性施策の歩み
●市民編集委員による座談会
●「かたらい」これまでの発行一覧
●小金井で働く
●インフォメーション
女性総合相談

２９号　平成２１年３月

●戸籍制度を考える
離婚後３００日問題
●男女共同参画社会の今までとこれから
●国際比較
（理系女性の少なさ）
●インフォメーション
女性総合相談／㈶２１世紀職業財団／マザーズハローワーク東京

３０号　平成２２年１月

●DV問題
配偶者からの暴力／警察によるDV対応について／特別寄稿「理解することが命を守る」／DV相談窓口及び関連書籍等のご案内
●特別寄稿「女性相談室の現状」
●国際比較
（新しいデータより）
●インフォメーション
DV相談／女性総合相談

３１号　平成２２年３月

●小金井市男女平等基本条例
特徴／しくみ／小金井市の男女共同参画の現状
●国際比較
（政治における男女平等）
●インフォメーション
苦情処理／マザーズハローワーク東京

４２号　　平成２７年９月

●イクボスを育てよう（寄稿）
●かたらい編集委員が考える、今「イクボス」を取りあげる理由
●小金井で働く
●国際比較（ガーナ）
●男女共同参画シンポジウムの紹介
●インフォメーション
苦情処理窓口／東京ウィメンズプラザ男性相談／女性総合相談

４３号　　平成２８年３月

●介護者の目線に立った支援をめざして（「認知症カフェおれんじ」を開催）
●小金井で働く
●国際比較（モルドバ）
●第２９回こがねいパレットの紹介
●子育てハンドブックの紹介
●平成26年度男女共同参画推進状況調査報告

４４号　　平成２８年９月

●学び、出会い、楽しむ！男性料理教室（小金井市翁味会・おやじランチ）
●男性でも参加できる小金井市の料理教室
●国際比較（インド）
●市民意識調査結果について
●国内研修事業参加費補助制度／保健センターでの男性参加可能な教室の紹介

４５号　　平成２９年３月

●改めて性的マイノリティ・LGBTについて考える（性的マイノリティ・LGBTについて／インタビュー（LGBTカフェ））
●国際比較（ベトナム）
●子ども家庭支援センター親子遊びひろば『ゆりかご』の紹介
●第３０回こがねいパレットの紹介
●マザーズハローク立川の紹介

４６号　　平成２９年９月

●多様な働き方としてのテレワーク（テレワークとは／テレワークの導入で多様な働き方を）
●国際比較（スリランカ）
●小金井で働く
●男女共同参画レクチャーコンサートの紹介
●第５次男女共同参画行動計画
●平成27年度男女共同参画推進状況調査報告

４７号　　平成３０年３月

●モラル・ハラスメントを考える（インタビュー／寄稿）
●国際比較（ネパール）
●小金井で働く
●第３１回こがねいパレットの紹介
●DVドメスティックバイオレンス法律相談（東京三弁護士会多摩支部）の紹介
●平成28年度男女共同参画推進状況調査報告

３６号　　平成２４年９月

●市立はけの森美術館所蔵作品展「料理して妻を待つ～中村研一と日常のモティーフ～」
●小金井で学ぶ
●国際比較（イラン）
●男女共同参画シンポジウムの紹介
●インフォメーション
マザーズハローワーク東京／国内研修事業参加費補助制度

３７号　　平成２５年３月

●農の喜び、仲間と共に～体験型市民農園・ベルファームを訪ねて～
●小金井で学ぶ
理系って、おもしろい！
●国際比較（アメリカ）
●第26回こがねいパレットの紹介
●インフォメーション
市民意識調査報告書／DV／苦情処理

３８号　　平成２５年９月

●「東京しごとセンター多摩」に行こう！
●小金井で学ぶ
●男女共同参画シンポジウムの紹介
●国際比較（台湾）
●インフォメーション
第４次男女共同参画行動計画策定／国内研修事業参加費補助制度

３９号　　平成２６年３月

●伝統に生きる！
江戸糸あやつり人形「結城座」
●小金井で学ぶ
●国際比較（ベルギー）
●「男性から見た男女共同参画」
こがねいパレット実行委員に聞く
●インフォメーション
国内研修事業参加費補助制度／苦情処理窓口／DV相談

４０号　　平成２６年９月

●「みんなおいで　また明日！」やさしさに包まれた、心かよい合う家
●小金井で働く
●国際比較
スウェーデンの暮らしから学ぶ
●男女共同参画シンポジウムの紹介
●ハローワーク立川　　マザーズコーナーの紹介

４１号　　平成２７年３月

●おやじから子どもたちへ遊びの楽しさを伝えたい（小金井三小おやじの会に聞く）
●小金井で働く
●国際比較（ペルー）
●第２８回こがねいパレットの紹介
●インフォメーション
男女共同参画施策の紹介／平成25年度男女共同参画推進状況調査報告

かたらい 2018 48号

「市制施行60周年」及び「かたらい創刊30周年」を迎えて

本年度、小金井市は市制施行 60 周年を迎え、男女共同参画情報誌「かたらい」も創刊 30 周年を迎えました。

小金井市は、男女共同参画社会の実現に向け、今後も「かたらい」を通じて男女共同参画の情報を発信し続けてまいりますので、皆様のご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

女性総合相談

日常生活のいろいろな悩み相談として、自分自身の生き方、仕事、近所づきあい等について、ひとりで悩まず、お気軽にご相談ください。カウンセラーが一緒に考えます。

- 相談日時：毎週金曜日と原則第２木曜日　午後１時３０分～午後４時３０分
- 場所：市民相談室（市役所第２庁舎１階）
- 相談方法：面談（電話相談可）要予約
- ＴＥＬ：０４２―３８７―９８５３　企画政策課男女共同参画室まで
- 費用：無料　　保育：１歳以上～未就学児が対象。１ヶ月以上前に要申込。先着順。

※プライバシーは守られます。

東京ウィメンズプラザ相談室のご案内

一般相談

配偶者からの暴力（DV）、セクシュアルハラスメント、夫婦・親子の問題、生き方や職場の人間関係など、さまざまな悩み相談をお受けします。

- ＴＥＬ：０３－５４６７－２４５５
- 日時：毎日　午前９時～午後９時

※年末年始（12/29 ～ 1/3）はお休みです。

男性のための悩み相談

夫婦関係、職場の人間関係など、男性が抱えるさまざまな悩み相談をお受けします。

- ＴＥＬ：０３－３４００－５３１３
- 日時：月曜、水曜　午後５時～午後８時

※祝日・年末年始（12/29 ～ 1/3）はお休みです。

相談は無料です。秘密は厳守します。
東京都に在住、在学、在勤の方を対象にしています。

編集後記

「かたらい」が30周年を迎えて、喜ばしいことだと思います。新しい西岡市長をはじめとして、男女共同参画を、より推進していくとともに、この「かたらい」も新しい視点から見ていきたいと思います。（佐藤百合子）

この10年で男女共同参画は大きく前進しています。次の10年でさらに加速度をつけて前進するであろう男女共同参画の一助になれれば良いと思います。（濱野智徳）

金田さんのインタビューでは、記事にまとめきれないくらい沢山の事をお話頂きました。ありがとうございました。（瓶方知代）

今号からはじめて参加しました。育児中の生活に新たな刺激が加わり、とても楽しかったです。（佐々木成美）

取材の中で、男女共同参画問題だけではなく、小金井市や市役所の抱える問題も見え、まちへの理解が深まりました。（田中映子）

今号は、創刊30周年記念号として企画し、通常よりページを増やし４色刷りで発行しました。

創刊30周年を迎えられたのは、皆様のご理解とご協力の賜物です。今後も、「かたらい」を通して男女共同参画の情報提供を行ってまいりますので、引き続きよろしくお願いいたします。（男女共同参画室）

「かたらい」は、公募による市民編集委員が、企画・取材・執筆を行っています。

小金井市男女共同参画情報誌『かたらい』第 48 号　2018 年（平成 30 年）9 月発行／企画・編集：かたらい編集委員会
発行：小金井市企画財政部企画政策課男女共同参画室　TEL：042－387－9853　FAX：042－387－1224
編集委員：佐藤百合子　濱野智徳　瓶方知代　佐々木成美　田中映子　男女共同参画室／監修：倉持清美（東京学芸大学教授）
古紙を配合しています。